

テレビ会議交流による遠隔合同ゼミを通して卒業研究を促進する実践の効果

宮地 功*, 成瀬 喜則**

The Effects of Practice for Encouraging Graduate Research through Remote Exchange between Two Schools Using Video Conferencing

Isao MIYAJI*, Yoshinori NARUSE**

1. はじめに

高等教育機関では、インターネットの発展に伴って、テレビ会議システムを用いて、遠く離れたキャンパス間を繋いで、遠隔教育の実施が増加している。また、遠く離れた地域にある学校同士による合同授業を実施している。特に、後者の合同授業では、両者の学生同士のインタラクションによって、協調学習ができ、考えを広げたり、深めるといった効果が期待でき、協調学習の価値は現在広く認識されている⁽¹⁾。

著者等も、テレビ会議システムを用いて、次に説明するようないくつかの試みをした。大学と高専の各1クラスの学生にインターネットを利用して、数学者について調べ、大学生と高専生の代表者による合同発表会を行った⁽²⁾。進路の決まった大学4年生が履修した科目、就職先の情報収集方法、就職活動の仕方などを高専1年生に話し、他者の考えを取り入れ、進路意識を高めることをねらった⁽³⁾。これらの実践によって、それぞれの目的をほぼ達成できた。

Nishihoriらは、英語教育にテレビ会議交流をして言語科目への態度や動機付けが向上し、会話スキルの獲得やそのスキルを異文化間の相互作用に使うようになったと報告している⁽⁴⁾。このように、同じ程度の年齢の仲間が教え合う協同学習では、その内容がま

たく構造化されていなかったとしても、教わる側の学習や動機付けが向上することが知られている⁽⁵⁾。

大学生が高専3年生に対して卒業研究について発表し、それについて質問と回答をやりとりするテレビ会議交流を10回実施した⁽⁶⁾。この「異校種間交流学習」を対象にした教育実践では、教育的意義を有した成果が認められた。卒業研究の内容を他人に分かりやすく説明することは、自らが取り組んでいる卒業研究に対して理解を深め、考えを広げる良い方法である。

ここでは、教育環境に違いがある集団におけるテレビ会議システムを利用した相互発表と相互情報交換に着目して、簡易なテレビ会議システムによって、高専生と大学生が研究内容についてプレゼンテーションし、それについて質問と回答をやりとりするコミュニケーションを行って、双方の学習者が自分の卒業研究をよく理解して、より深く研究を進めるために遠隔合同ゼミを行った。これは、文献(6)の実践に、「高専生が自分の卒業研究内容を大学生に説明する」と「大学生が高専生の説明に対して質疑を行う」活動が新たに付加されたものである。この実践について、実践方法と効果について報告する。

*岡山理科大学 (Okayama University of Science)

**富山高専専門学校 (Toyama National College of Technology)

受付日: 2008年12月26日; 再受付日: 2009年6月20日; 採録日: 2009年11月27日